

救急に関するトレーニングについて

■「救急搬送をことわらない」=統合新病院の基本方針

基本理念

「おもいやり」

私たちは、市民とともに、
市民中心の医療を提供し、
市民の健康を守ります

基本方針

1. 信頼される最適な医療を提供します
1. **救急搬送をことわらない体制を目指します**
1. 将来を担う優れた医療人を育成します
1. 地域に根付いた医療を実践します

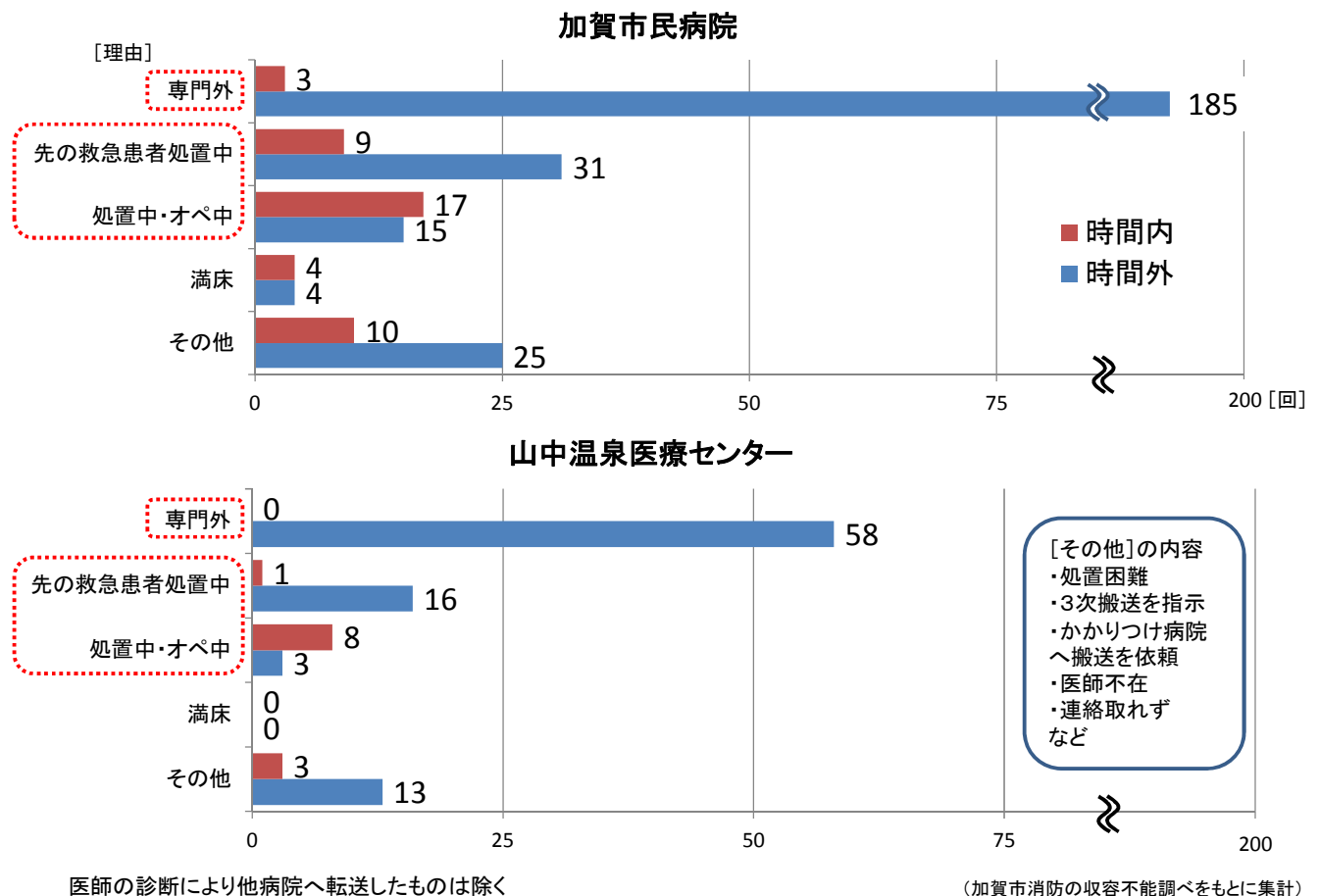
医師をはじめスタッフ一人ひとりの高い“意識”と“能力”が求められる

2病院での救急受入は増加傾向 = **医師や看護師等のスタッフの頑張り**
(救急を受け入れる“意識”が浸透してきた)



“意識付け”だけで救急患者の受入を求めるのは、医師にとっても負担が大きい
⇒ **専門外の傷病についても、基本的な知識や技能が求められる**

■救急受入が困難とされる理由別の回数〔平成24年1月～12月〕



■受入困難とされる主な理由と考えられる対応策

理由	問題点	対応策
専門外	<ul style="list-style-type: none"> ・バックアップ体制 ・診療できる領域、経験 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間外においてのしっかりとしたオンコール体制を構築 ・専門外の傷病でも、基本的な対応ができる範囲を広げる
先の救急患者処置中 処置中・オペ中	マンパワーの不足	<ul style="list-style-type: none"> ・病院統合によるマンパワーの集約（複数医師の当直体制） ・継続的な医師確保の活動 ・他科の医師が応援できる体制を構築する

- 新臨床研修を受けた若手医師は、比較的広い分野で研修しており、救急の基礎力はあるが、あまり経験値は高くはない。
- 中堅・ベテラン医師は、専門性は高いが、幅広く教育を受ける機会に恵まれなかった場合もある。

⇒ トレーニングにより、一人ひとりの救急対応力を高められないか
 専門外についても、再習得・トレーニングする機会が必要

■期待される効果

- 積極的に救急を受け入れている医師
知識、技能の研鑽(質的な向上)
- 救急受け入れにあまり積極的ではない(積極的になれない)医師
専門外の分野の救急における基本的な知識、技能の習得



医師の不安感の軽減、救急医療を担う医師の確保

■トレーニングの方法

① OJT

- ・経験豊富な医師による現場での指導
- ・救急専門医等による指導＝大学病院との連携
(金沢大学 稲葉英夫教授が、加賀市民病院で月1回指導)

② 専門的なトレーニングコース

- ・学会等によるトレーニングコース(参考資料1を参照)

③ 病院と救急隊との症例検討会、研修会等

- ・救急隊との連携向上＝医師、看護師等と救急隊の顔の見える関係
- ・救急隊のスキル向上＝適切な病院前救護、トリアージ

■病院と救急隊との症例検討会、研修会等(実績)

① 南加賀・嶺北救急医療意見交換会

概要	福井大学附属病院、加賀市民病院、山中温泉医療センター、加賀市消防が、1～2例の救急搬送症例を持ち寄り、福井大学附属病院 寺澤教授からの助言、解説も交え、意見交換を行う。毎回50～60名の参加があり、活発な意見交換が行われている。
開催	年に1～2回(過去6回開催)
参加者	・福井大学附属病院: 寺澤秀一教授ほか、救急部所属医師 ・加賀市民病院: 医師、看護師、技師、その他医療スタッフ ・山中温泉医療センター: 医師、看護師、技師、その他医療スタッフ ・加賀市消防本部: 救急救命士

② 石川県救命救急研究会

概要	県内の救急医療に携わる医療機関の医師や各消防本部の消防長、救急救命士等で構成する研究会
開催	年2回(3月・9月) 世話人会、学術集会
世話人・会員	加賀市民病院: 小林病院長、石田副院長、白崎診療部長 山中温泉医療センター: 大村センター長、吉田副センター長、近澤診療部長 加賀市消防: 消防長、大和救急救命士

③ 石川EMS研究会

概要	金沢医科大学病院救急救命科が中心となった研究会。救急救命士、救急隊員をはじめ、救急医療に携わる医療従事者を対象として、救急医療に関する日常の問題を気軽に話し合えることを目的としたもの。
開催	年2回 不定期開催
参加者	金沢医科大学病院救急救命科の医師、看護師、北陸三県の各消防本部

④ 救急救命士の病院実習

概要	加賀市民病院及び山中温泉医療センターにおいて、救急救命士が実習。血圧測定、心電図モニター、静脈路の確保など。
時間	年間64時間(2年間で128時間)
参加者	加賀市消防所属の救急救命士が実施

⑤ その他(病院と救急隊の連携)

医師・看護師にも院外の救急現場を見ていただくため、「救急の日」に救急車同乗体験を実施。加賀市民病院と山中温泉医療センターの医師、看護師に、通信指令室における119番通報の受診から、救急出動、病院搬送までの一連の流れを体験してもらう。

検討事項

「救急搬送をことわらない体制」を実現するためのトレーニングについて

【検討の視点】

- 今いる医師に、なるべく幅広く診てもらえるようにするには・・・
(救急の専門性を高める < 一般的な医師の“守備範囲を広げる”)
- 医師以外の医療スタッフ、救急隊員のスキルアップを図るには・・・
- トレーニングを受けやすい環境整備も必要ではないか・・・
(例えば、病院でトレーニングコースを開催する、或いは外部で開催されるコースへの参加を促す、支援する等)